慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ある異端者の回心：ヴァルデスの位置づけの試み
Sub Title	On the conversion of Valdes
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.1 (1986. 7) ,p.19- 54
JaLC DOI	
Abstract	This essay attempts to ascertain certain details about the life and thought of Valdes, a layman Christian thinker, who was condemned by the Roman Catholic Church as a heresiarch in the late 12 th century Valdes was a wealthy merchant in Lyons when he had a sudden conversion, he abandoned his fortune and began to preach without license or the approval of Church officials Nevertheless, he won wide support among the populace Valdes's main motivation centered on the appeal of the true apostolic life, to which it appears he was smglemindedly guided by his socio-rehgious position in contemporary society In those days, some common people became wealthy ty accumulating property and promoted themselves to a higher social status. Religious roles assigned by the Church to laymen like Valdes, however, were still very minimal in those days Thus, Valdes's religious zeal and the social means he utilized to express himself as a religionist were definitely out of proportion For Valdes, the salvation of the soul was paramount, thus, given such a spiritual-social situation, his proselytizing actions assumed radical forms In those days, there were many other men and women of a similar spiritual nature who led lives akin to that of Valdes and who joined like-minded religious movements. Not only evangelical heretics like Valdes but also dualist heretics such as Cathan and Pubhcam represented comparable trends of evangelical awakening in that particular age Scholars have often treated Valdes's role and positionm an exaggerated manner, completely disregarding his social background Herein, I have tried to present a more balanced position of Valdes's life and thought in the general milieu of contemporary lay piety This approach in no way diminishes Valdes's historical importance His radicalism surely contributed to spurring on the introduction of lay religious zeal into the spiritual and ecclesiastical life of the time It can be said that the conversion and proselytism of Valdes acted as a mirror reflecting 12 th century European religious activity
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860700-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある異端者の回心

――ヴァルデスの位置づけの試み――

神崎忠昭

西欧中世には数多くの異端が生じたが、その中でもヴァルデス派の歴史にはいくつかの点で注目すべきものがある。第一に、ヴァルデス派はカタリ派とともに中世盛期の二大異端とされたこと。第二にヴァルデス派は、宗教改革の結果、教義等に変化は生じたものの、今日も存続していること。そしてなによりも第三に派の創立者（カタリ派などと異ってその核となった人物が特定できる）であるヴァルデスの生涯が「聖人」と「異端者」の微妙な境界線上にあることである。事実ヴァルデスは、当時の聖人たち、特に聖フランシスコとの類似が以前からたびたび指摘されてきた。たとえばアメリカのフランシスコ会の研究誌 *Franciscan Studies* に「ヴァルデスがいなければフランシスコ会も存在しなかったであろう。」という結論の論文[1]が掲載され、少し後にそれを反駁する論文が提出された。それは歴史学的手法によってではなく「厳密な記号論理学」に則って前述の主張を否定しようとしたものである[2]。歴史学的に見れば異常な反応であるが、それだけに聖人と異端者が同じようなものだといわれたふつうのフランシスコ会士たちの混乱ぶりがうかがえるであろう。本論文はヴァルデスの行動、特に回心と初期の行動がどのような展望に位置づけられるものか考えることを目的とする。しかし、この問題はたいへん難しいものであり、特に教会論との関係で私の力の及ばぬところが大きい。無謀とは思われるものの、あえてある位置づけを行ってみたいと思う。なおこの全体の枠組が、正しく理解あるいは正しく適用しているかは別として、グルントマンあるいはシュニュに負っているのは確実である。

まず第一にヴァルデスの生涯について確実と思われる点を時代順に列記しておこう。

(一) 彼は歴史上実在する人物[3]で、ヴァルデス派の創始者であったこと。

(二) リヨンの富裕な商人であったこと。

(三) 一一七〇年代に宗教的回心を経験したこと。

(四) 一一七九年の第三ラテラノ公会議に訴えを行なったこと。

(五) 一一八〇年にリヨンで教皇使節等の前で信仰告白を行ったこと。

(六) リヨン大司教に破門、追放されたこと。

(七) 一一八四年のヴァローナ教令で教会分裂者として断罪されていること。

(八) 十三世紀の初め頃に死亡したこと。

以上の八項目については複数の史料によって確認できる。本稿では特に破門以前の回心と彼らの生活を考えてみたい。

ヴァルデスの回心についての史料で古くまた詳細に語っているのは、ラン無名大年代記 *Chronicon Universale Anonymi Laudunensis* である。この年代記は一二一九年の項で終わっているが、一一七三年、一一七七年の記事にヴァルデス派の様子が記されている。

「主の御托身より一一七三年。ガリアのリヨンにヴァルデスという名の市民がいた。彼は不正な高利貸によって多くの貨幣を貯えていた。ある日曜日、吟遊詩人の前に人が集まっているのを見て、その群衆の方へと近寄った。すると、その吟遊詩人の言葉によって痛悔の念がおこり、吟遊詩人を家へと連れ帰り一心に彼の語るところを聞いた。その物語の主題は、いかにして聖アレクシスが父の家において聖なる死を得てこの世を去ったのかということである。朝になるとヴァルデスは自分の魂についての助言を求めようと神学校へと急ぎ行った。神に達する多くの道を教えられた彼は、教授にどの道が他のすべての道にくらべてより確かでより完全かを尋ねた。教授は彼に、『もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い……（マテオ福音書十九章二十一節）』という主の命令を示した。そこで彼は妻の許に帰ると、彼は彼女に、彼の全財産のうち、動産、あるいは不動産のいずれかを自分のものにするように選ばせた。不動産は土地、川、森、牧草地、家屋、収益権、

ブドウ畑、製紛場、パン焼きがまから成っていた。彼女はそのようなことをしなければならないのをひじょうに悲しんだが、不動産を選んだ。彼は動産のうち不正に得た分を返し、自分の小さな娘二人に多くの金を与え、彼女らの母親の知らぬうちに、フォントブロー修道院に託した。しかし、大半は貧者のために施した。その頃、大飢饉がガリア、ゲルマニア全土で荒れ狂った。そして前述の市民ヴァルデスは、聖霊降臨から聖ペテロの鍵の祝日までの間（五月二十七日から八月一日まで）、一週間に三日、彼のところに来るすべての人々に対してパンと食物と肉を施した。聖母被昇天の祝日（八月十五日）に彼は街頭でなにがしかの貨幣を貧者たちにまき、叫んで言った。『誰も二人の主人に同時に仕えることはできない。神と富とに。』その時急ぎ集った人々は彼が正気を失ったと考えた。すると高い所にのぼり彼は言った。『おお、友人である市民諸君。あなた方が考えているように私は気が狂ったわけではない。私は敵たちに報復しているのだ。彼らは私を自分たちの奴隷とし、神よりも貨幣に私が心を傾けるようにした。創造者よりも被造物に私は仕えるようになったのだ。私がこのようなことを明らかに行ったので、ひじょうに多くの人々が私を非難しているのを私は知っている。しかし、このようなことを私がしたのは、私自身のためであると同時に、あなた方のためでもあるのだ。私について言うならば、私がひきつづき貨幣をもっているのを見たならば、その人が私は気が狂ったと言うようにである。あなた方のためというのは、あなた方が神に希望をおき、富に希望をおかぬことを学ぶようにである。』翌日教会からの帰途、神のために食物を与えてくれるようにヴァルデスはかつての仲間である市民に求めた。その男は彼を家に連れて帰り、『私が生きている限り、私はあなたに必要なものを与えよう。』といった。そのことが彼の妻の知るところとなるや、彼女は大いに悲しみ、狂ったようになって市の大司教の許に駆け込んだ。そして彼女の夫が彼女以外の他人からパンを乞うたことを訴えた。そのことは大司教とともに居あわせたすべての人々の涙をさそった。そこで市の大司教の命令によって、彼女は自分の夫を一緒に、大司教の前に連れて行った。『おおあなた、他人よりも私自身があなたに施しを与えることによって、私が自分の罪をあがなう方がよいではありませんか。』それから後大司教の命令により、この市において彼は妻以外の者と食事をすることを禁じられた。」

「一一七七年。前述のリヨン市民ヴァルデスは、以降の生活において金も銀ももたず、また明日のことを思い煩わぬことを天上の神に誓い、自分の計画の同志を有し始めた。彼らは彼の模範に従い、もてるものすべてを貧者たちに施し、自発的清貧の信奉者となった。彼らは次第に、密かにあるいは公然と、勧告しながら自分と他人の罪を非難し始めた。」

「一一七八年。ラテラノ公会議が教皇アレクサンデル三世によって開かれた。……この会議は、異端とすべての異端の保護者とを断罪した。教皇はヴァルデスを抱擁し、彼がたてた自発的清貧の誓願を許可したが、彼あるいは彼の仲間が聖職者の求めなくして説教の職務を行なうことを禁じた。彼らはしばらくの間この命令をまもったが、その後不従順となり、多くの人々のつまづきとなり、自らの滅びにも陥った。(4)」

もう一つヴァルデスの回心当時の状況をよく知らせてくれるのが、ステファーヌス・デ・ブルボネの「聖霊の七つの賜物について」*De Septem donis Spiritus Sancti*（以下「聖霊」）である。彼はドミニコ会士で異端審問官でもあったが、一二二三年から一二六一年の間に数度にわたり、リヨンに滞在し、ヴァルデスを直接知る人々、あるいはいわゆるヴァルデス聖書の翻訳活動に従事した人々を直接知っていた。「聖霊」は一二六〇年頃記されたとされる。

「ヴァルデス派は、ヴァルデスとよばれたこの異端の創始者にちなみ、このようによばれる。またリヨンの貧者ともよばれる。というのは、彼らはこの都市で清貧の誓願をたて始めたからである。初期のヴァルデス派のことを知る数名の者たち、また私たち修道士の友人であり、大いに尊敬される富裕なリヨンの司祭ベルナルドゥス・イドロスの語るところによれば、この異端は次のように始まった。まだベルナルドゥスが若く、写字生をしていた頃、ヴァルデスたちがもっていた聖書をステファーヌス・デ・アンザという文法教師が翻訳するのを、彼はヴァルデスのためにロマンス語で書きうつすことを金銭でもってひきうけたというのである。後にステファーヌスは司祭になったが、彼が建てさせていた邸のテラスから落ちて突然死んだ。彼のことを私は何度か見たことがある。

前述の都市の富裕な市民ヴァルデスは、福音書が読まれるのを聞き、何が説かれているのかを理解しようと思った。彼はよく文字が読めるわけではなかったので、先

程、名前をあげた聖職者たちと契約を結んだ。つまり一人が俗語に訳し、もう一人がそれを筆記するのである。同様にしてこれらの聖職者はヴァルデスのために聖書のうち幾つかの書を訳した。また教父たちの抜粋を訳し、ヴァルデス派はそれを *Sententiae* とよんだ。それを読んで彼らは暗記した。ヴァルデスは使徒たちにならい福音を完全に遵守することを決めた。世俗を軽蔑し、全財産を売り払い、彼は貧者たちに金を投げ与えた。また使徒の職位を横領し、福音と、彼が心で把握したすべてを広めることを企てた。道端やその場で説教し、多数の男女を呼び集め、ヴァルデスと同じようにすることを勧告し、彼らに福音を確証し彼らをまた周辺の村々へと説教するように派遣した。これらの人々は卑しい職についており、男性も女性も全く無学であったが、村々を歩き回り、家々の中に入り込み、その場であるいは教会の中でさえ説教し、他の人々に同じことをするようにすすめた。しかしながら、無謀さと無知によって多くの誤ちを広め、いたる所につまづきのもとを播き散したのでリヨン大司教ヨハネスは彼らを呼び、聖書で説明し説教することを禁じた。しかし彼らは使徒たちの答えを指摘し、また彼らの指導者はペテロが祭司長たちの前で答えたように、ペテロの職位を横領して言った。『人よりも神に従うべきである。神はすべての人に福音をのべ伝えるように使徒たちに命じられた。』かくて、ヴァルデスとその仲間は思い上がりと使徒の職位の横領から不従順に陥り、ついて頑固 contumaces になり、最後には破門されてこの地方から追放された。ラテラノ公会議の前にローマで開かれた公会議に召換されたが、ヴァルデス派は強情に抵抗を続けて、審問官たちに教会分裂派とされた。この分派の始まりは一一七〇年頃〈Bellesmains〉とよばれたリヨン大司教ヨハネスの時であった。」

「その後プロヴァンス地方やロンバルディア地方で、他の諸異端と混りあい、彼らの誤ちの毒を飲み、そして今度は他の者たちへとその毒をもたらしたので、ヴァルデス派は教会にとって最も執拗で危険な敵と断じられた。彼らはあらゆる所を往き交い、真理を有していないのに、聖性と信仰の外観を装い、様々に変装していたので、最も危険であるばかりか最も人に知られなかったのである。」(5)

この二つの史料等から、ヴァルデスの回心は清貧への希求から生じた運動であるという解釈がH・グルントマン以降主流であった。しかし、K・ゼルゲがいくつかの根

本的な疑義を提出した。その要点は次のとおりである。[6]

(1) ラン無名大年代記のヴァルデスについての記事は、聖人になりそこなった異端者の「聖人伝」であり、類型的であり、信用するに足りない。

(2) 「聖霊」の記事に従い、ヴァルデスの回心は福音書によって始まり説教を中心としたものであり、説教せずにただ清貧であったという時期はなかった。

(3) ヴァルデスは他の異端の影響をうけることなく、たとえば〈人よりも神に仕えるべきである〉という発言も聖書からの知識のみで主張した。

(4) ヴァルデスの説教は、自分たちと同じように行動しろというだけでなく、施しを勧めそれによって罪をあがなうというものであった。

これらの疑義を検討することによって、ヴァルデスの回心をより明確に描くことができると私は考える。

まず、第一の問題の「叙述は一つのトポスに過ぎず、その信憑性はうすい」という点であるが、ゼルゲが強くラン無名大年代記を排除しようとしているのは、当時南フランスに広く流布していた聖人伝との関係であろう。すなわち聖女フィデス伝や聖アマドール伝など清貧の徳を主要なテーマとするものである。なるほどラン無名大年代記の記述は、トゥーゼリエやゴネも認めているように事実を物語化しているようだ。[7] しかし、もちろん留保をつける必要はあるが、聖人伝との類似というのは事実の実在を疑わせしむ反面、かえって当時の心性から考えてその事実の存在を有りうるものと考えさせないだろうか。そのような聖人伝が広く流布していたということはこの徳が強い関心をひいていたことを暗示する。ラン無名大年代記の示すように吟遊詩人あるいは聖堂付の説教師たちの語る聖人伝には群衆がおしよせたにちがいない。さらにこの当時の人々は逐字的に ad litteram に「教え」を実行に移したと思われるからである。例えば、「使徒行伝」を実践し共同生活をおくる人々。「聖アントニウス伝」を読んで隠修士となるもの。「聖ベネディクトゥス会則」を文字通りに実行する修道士たち。彼らは現代人とは異なり、言葉の実在性についてこのような強い確信をもっていたように思われるのである。

また、ラン無名大年代記の叙述を他の史料が補強補完している。例えばヴァルデスが所有していたとされるパン焼がまは、聖書の翻訳をしたステファーヌス・デ・アンザが彼から受けとり、死後にリヨン教会に遺贈したことが教会の記録からわかっている。[8] また「金も銀ももた

ず、また明日のことを思い煩わぬこと」を誓ったことも、年代が異なるが、後述のヴァルデスの信仰告白の「そして明日のことを思い煩わぬように貧者であることを決めた。金も銀も、日々の衣食以上のものも誰からも受けとらないであろう。」と一致している。また第三ラテラノ公会議の記述については、異端審問官モネタの記すところと合致するし、[9] またグラティアヌス教令集の規定にも則っている。[10] アレクサンデル三世が傑出した教会法学者であったことを考えれば信憑性は高いであろう。このように知る限りでは落差は大きいものの、大きな矛盾は生じない。それ故にラン無名大年代記の記述を本稿では大筋として受け入れることとしたい。すると問題は清貧と説教の関係である。

ゼルゲの提出した第二の問題点であるが、「聖霊」は福音書の契機と説教権をヴァルデスの回心において重視している。ヴァルデスの回心の動きにおいて説教の問題を特に強調している史料は後はフィオーレのヨアキムの論争書だけである。[11] ところで、「聖霊」には、よく似た記録が存在する。その一つは「カルカッソンヌ異端審問記録」である。これは一二三三年から一二四一年の間に記され、「聖霊」に先行するものである。

「ヴァルデス派あるいはリヨンの貧者。彼らは一一七〇年頃生じた。その起源を Valdesius あるいは Valdensis というあるリヨン市民に有する。彼は金持ちであったがすべてを放棄し、使徒たちのように清貧をまもり、福音を完全に遵守することを企てた。彼は福音書とまた聖書のうち他のいくつかの書をガリアの言葉に訳させた。聖アウグスティヌス、聖ヒエロニムス、聖アンブロシウス、聖グレゴリウスの著作を訳させ、表題に従って並べた。それを彼と彼の追随者たちは *sententiae* とよんだ。それらを彼らは何度も読み、よく理解できなかったにもかかわらず、自分の考えで高慢になった。よく文字が読めなかったにもかかわらず、使徒の職位を横領した。街々や道々であえて福音を説教した。ヴァルデスは男女とも多くの人々を同じような横領に巻き込み、弟子のように彼らを説教のため派遣した。彼らは無学文盲だったが、村々を徘徊し家々に入り込み、男も女も道端のみならず教会の中でさえ説教し、多くの誤ちをいたるところに播き散した。リヨン大司教 Jo. de Belles-mains が彼らにこれらのことを禁じると、彼らは人よりも神に従うべきであると言い、福音をすべての人に告げ知らせるように神が命じられたことを言った。また高位聖職者、

聖職者たちが富をあふれる程に所有し、楽しみの中に暮しているとヴァルデス派は拒絶した。彼らは破門され、生まれ故郷の市から追放された。かくして彼らは地上に広まり、この地方、近隣の諸地方、ロンバルディアの境界地方にも広まった。彼らは教会から切り離され、他の異端者たちと混り合い、彼らの誤ちを飲み込み、地の異端者たちに助長されて、古代の異端者たちの誤ちと異端とを一つにした。――彼はインサバティティとよばれた。なぜならば彼らの初期にヴァルデス派の完全者は靴の上部に盾のかたちをした霊的印章をおびていたからである。(12)」

もう一つさらに似たものが存在する。クリュニーの修道士ポワティエのリカルドゥスに帰せられる「教皇アレクサンデル三世伝」である。これは一一八一年から一二一六年の間に書かれたと推測され、「聖霊」さらに「異端審問記録」よりも古いものである。

「一一七〇年頃、ヴァルデス派あるいはリョンの貧者とよばれる異端が始まった。その創始者はヴァルデスという名のリョン市民で、彼にちなんでこの異端の追随者はこのようによばれる。彼は金持ちであったが、すべてを放棄し、使徒たちのように清貧をまもり、福音を完全に遵守することを企てた。彼はまた福音書と、聖書のうち他のいくつかの書を俗語に訳させた。のみならず教父たちの著作を訳させ、それを *Summae* とよんだ。ヴァルデスはそれらを何度も読み、よく文字が読めなかったにもかかわらず、自分の考えで高慢になった。使徒の職位を横領し、街々や道々で福音を説教し、多くの男女を同じような横領にまき込み、弟子のように彼らを説教のために派遣した。彼らは無学文盲だったが、村々を徘徊し家々に入り込み、多くの誤ちをいたる所に播き散した。リョン大司教 Johannes Beles-Mayns によばれ、彼らは禁じられた。しかしながら従うことを望まず、狂気のおおいをつけて言った。『人よりも神に従うべきであり、すべての人に福音を告げ知らせるように』と主が使徒たちにいわれたことを言った。彼らは、主が使徒たちにいわれたことを自分のものとし、偽って清貧の誓願をたて、聖性のイメージをでっち上げ、自分たちが使徒たちの模倣者であり後継者であると公言し、聖職者と司祭とを拒絶した。かくして説教の職位を傲慢にも横領して不従順となり、ついで頑固となり、さらに破門されて生まれ故郷から追放された。ちょうど第四ラテラノ公会議の前に、ローマで開かれた教会会議に召換され、強情

な教会分裂派とされた。多くの地方に広がり、ロンバルディアとの境界地方で他の異端者たちと混ざり合い彼らの誤ちを飲み、模倣して、異端者と判決された。[13]」

これら三つの史料を比較してみると、文面がほぼ一致していることがわかる。さらに「教皇アレクサンデル三世伝」が十四世紀前半の異端審問官ベルナルドゥス・ギーの手稿本中に含まれていたことを考えあわせれば、即断は危険ではあるが、一つの結論が考えられうる。つまり、異端審問官たちには一つの原型となる文書が存在し、それが伝わったというものである。それはおそらく「教皇アレクサンデル三世伝」かあるいはそれに近いものであろう。ステファーヌス・デ・ブルボネはそれに自ら見聞した情報を加えたものと思われる。正確な事実が徐々に忘れられ始め、同じ誤ち、例えば、ヴェローナをローマと間違えているのなどはそれによるのであろう。さて「異端審問記録」と「教皇アレクサンデル三世伝」では福音書による回心が特に強調されてはいない。すると「聖霊」においてステファーヌス・デ・ブルボーネが加えたものは何だったのだろうか。

この類似を念頭においてもう一度「聖霊」を読んでみると、聖書の翻訳についての記事以前に、「清貧の誓願をたて始めた」という叙述がある。文脈的にはその後の福音書の翻訳の部分がステファーヌスの見聞によって拡大されているに過ぎないのである。それではステファーヌス固有の叙述はどのような意味をもつのであろうか。私にはここにはステファーヌス自身の立場が反映されているように思われる。彼は托鉢修道会、特に説教者修道会に属し、説教権の問題について敏感であったろう。また異端審問官としてこの種の書物の情報について強い関心をもっていただろうことである。このように考えてみると、特に説教権の問題が突出しているようには思われない。福音書翻訳以前の事実が、この関心に吸収されてしまっているのである。

托鉢修道会士たちの生活は大変よくヴァルデス派のものと似ている。ともに清貧と説教を奉じている。事実、フランシスコの弟子たちはドイツにおいて異端者とまちがえられている。彼らとヴァルデス派の説教の大きな違いは、もちろんこれがすべてではないが、mandatum を得ているか否かをということである。例えばアウグスブルクのダビィドは、十三世紀中頃のフランシスコ会士でやはり異端審問官だったが *Tractatus de Inquisitione hereticorum*（一二七〇～一二七二頃著述されたと推測

される。）の中で次のようにヴァルデスの回心のことを記している。

「リヨンに単なる平信徒がいた。彼らはある精神によって燃え上がり、他のすべての人々にまさっていると傲慢にも考えた。福音の教えに完全に従って生き、文字通りに完全にまもることをうぬぼれて行ない、その結果、彼らは教皇にこの生活形態を確認してくれるように要求した。その時までは、至上の使徒権が教皇に存することを認めていたのである。後になって、より公然と自らがキリストの弟子であり、使徒の後継者であることを公言し見せびらかすために、彼らは説教職を潜越にも奪い始め、キリストは弟子たちに福音を伝えるように命じられたといい、この福音の言葉を自己流にあえて解釈し、他の人々が文字通りにこれらの言葉をまもっていないと考え、自分たちのみが使徒の模倣者であるとした。彼らが説教職を横領したと知ると――単なる平信徒である故に、この職は彼らには許されていない――教会は彼らに説教を禁じ、彼らの不従順に異議を申し立て、破門した。[14]」

この非難の中で、清貧のことは言及されていない。これはヴァルデスが清貧の生活をおくっていないというよりは、むしろダビィドにとってそのようなことは問題にならないからであったにちがいない。問題は使徒的生活の僭称と説教権の横領だったのである。ここに、私は、托鉢修道会士としての立場、異端審問官としての立場が反映されていると思う。「聖霊」についても、これと同じような傾向が認められうると考えるのである。

さらに、説教と清貧の関係についてもう一つ考えるべきことは、ヴァルデスが平信徒だったことである。ヴァルデスと同じような行動、使徒的清貧と説教の生活をとった先行する人々の多くは、聖職者あるいは修道士出身だった。例えば、ローザンヌのヘンリクス、ブリュイのペトルスなどである。それ故にそこには清貧を説教のために不可欠のものとする主張があったことは確かである。正統派の大立物で枢機卿であったペトルス・ダミアーニは、「清貧の者が説教に向いている」と確言している。[15]説教の動機が確かに優先していたであろう。しかし、彼は確実に平信徒であり、ラン無名大代年記の記述を信じれば、おそらく商人で高利貸しを行なっていた。また全ての史料が一致して述べているのは、彼がラテン語、つまり当時の宗教的行為に参加する手段を欠いていたことである。そして、救いへの道を理解しようとして聖書

の翻訳を依頼したのである。そこに達するには、福音の教えを核として回心を結晶させる動機あるいは環境が必要だと思われる。もちろん、これはヴァルデスの回心が社会、経済的要因から生じたと主張することではない。すべては宗教的要因、キリスト教的完全を中心としてまわっているからである。

当時、都市内に存する貧富の差は大きかった。ヴァルデスのような巨富を一代で築いた商人は現実にリヨンに存在していた。[16] また同時に都市は近郊の農村から来る新来者であふれていた。遠距離交易などで財産を築く者がいれば、同時に失う者も存在していた。貧者の存在は、個人的にはあわれむべき存在として考えられてはいたものの、全体としては貧者は神の摂理の中でそのように創造されたものとしてそのまま受け入れられ、あるいは非自発的貧困は病気と考えられていたのである。[17] ヴァルデスの最終的回心は、そういう都市内での飢饉の際におこったのである。巨万の富と極貧、このコントラストを回心の動機と考えたならば、心理的解釈すぎるであろうか。

さらに当時は、良い商人というものは存在していなかった。商人とはすなわち悪い存在で、せいぜい必要悪にすぎなかったのである。ましてや、高利貸は、ヴァルデス自身が訴えを行った第三ラテラノ公会議の教令によれば、聖体拝領はできないし、もしこの罪のうちに死んだならばキリスト教徒としての埋葬は受けられないのである。[18] 前述のように清貧を説く聖人伝のひじょうな広がり、聖アレクシス伝あるいは福音書の一節は決定的な刺激、回心の最後に必要であったものかもしれない。しかし、ヴァルデスはすでに心の中に動機、彼の信仰のトーンをもっていたはずである。それ故に、説教ではなくこの清貧をめぐる問題こそがヴァルデスの回心の動機であると私は判断する。

このことはまたヴァルデス派分裂当時の事情を伝える *Rescriptum*[19] からも裏づけられるだろう。ヴァルデスは最後まで支持者たちに手労働を許さなかったという。手労働が必然的にもたらす道具・材料の所有、商業活動との関係、定住など清貧の誓願を脅すかもしれない要素をヴァルデスは避けたかったからではないだろうか。

以上のことから、ヴァルデスは聖アレクシス伝あるいは福音書の朗読などによって、福音的清貧の教えを核とした回心を経験し、それをより理解しようと欲し、福音書を翻訳させたと私は結論したい。しかしまた、清貧の

実践は、ひじょうに段階的であったであろう。翻訳の依頼は金銭で行なわれたし、ラン無名大年代記の記すように貧者に金を与えている。完全に清貧になった時はすでに説教を開始していることはラン無名大年代記からも推測できる。それ故に「完全な」清貧でいて説教をしない時はなかったという主張はある程度納得できるものであるが、回心へとすすませたものは清貧の徳であろうと考える。が同時に清貧と説教は、福音の確信においては、切り離すことができないものであり、後述するように当時の「使徒的生活」の両側面にほかならないのである。

さて、ゼルゲの提出した第三の疑義であるが、回心の初期の段階においては、他の異端者との関わりは完全になかったであろう。なぜならば、ヴァルデスが助言を求めに行ったのはリヨン教会の神学者であり、翻訳を依頼したのは、リヨン教会の文法教師と写字生だったからである。異端者に求めたわけでは決してない。また彼らが何度も読んだという聖書等は第三ラテラノ公会議で何ら嫌疑をかけられていない。またヴァルデス派のものとされるメッスの福音書の註解は今日でも平信徒にすすめられるべきものであるとされる程である。(20)

しかし、リヨン大司教ヨハネスにより、一一八一年から一一八四年の間に、発せられた破門の際にはやはり他の異端の影響を受けていたであろう。それが端的に表われるのが、「人に従うよりは神に従うべきである」という発言である。これはローザンヌのヘンリクスが、ルマン司教の前でのべたのと同じである。(21) この主張は単に聖書を読むことによってももちろん可能ではあるが、当時ヴァルデス派が他の異端の影響を受けつつあったのは、前述の諸史料のみならず、後述のヴァルデスの信仰告白を通じても明らかからである。つまり、「これと同じ信仰告白をしない者をヴァルデスの仲間とみなさないでほしい」という主張が見られるのである。当初の回心は全く正統的なものだったが、ヴァルデス自身さえも自分たちの信条及び生活等に適合する要素を徐々に吸収していったと考えるのが自然ではないかと思われる。

さて第四の疑義、つまり説教の方法であるが。この点についてはゼルゲの主張に賛成したい。なぜならば後のヴァルデス派内にはやはり完全な清貧を実行しない人々が存在していたからである。「彼らの分派は二種に分けられる。ある者たちは完全者と呼ばれ、彼らこそがリヨンの貧者ヴァルデス派とよばれる」(22)からであり、他には、説教師等の物質的維持をたすける amici とよばれる人

々等がいたからである。またラン無名大年代記に見られるように、施しを与えることによって自分の罪をあがなおうとする人々がいたからである。それ故にヴァルデスは清貧の徳を説き、多くの人々に自らと同じようにするように説いたが、同時にそこまでは踏みきれない多くの支持者を集め、彼らの中間的立場をも認めていたのだろう。[23]

さて、ゼルゲの提出したいくつかの問題を通じて、ヴァルデスの回心はより明確になったと思われる。つまり、ヴァルデスの回心においては清貧の徳の魅力が大きく作用していたということである。しかし、この清貧のみを特に強調することは誤ちである。彼の目ざしたものは単に清貧のみではなく、使徒的生活だったからであり、そこから説教は切り離し得ないものである。

ヴァルデス自身が、自己の信条および生活をどのように考えていたかは、「ヴァルデスの信仰告白」を通じて明らかである。この信仰告白は一一八〇年にアルバノ枢機卿司教で教皇使節であったヘンリクス等の前でヴァルデスが行ったものである。

「父と子と聖霊と最も聖にして永遠なる童貞マリアの名において、すべての信者に次のことは知っていただきたい。私ヴァルデスと私の兄弟たちが、聖なる福音書が私たちに示されたように、以下のことを心において信じ、信仰によって理解し、自分の口で告白し、簡単な言葉で確言するのを。すなわち、父と子と聖霊は三つの位格にして一なる神であり、神の三位一体は存在を等しくし、実体を等しくし、等しく永遠であり、等しく全能であることを。そして三位一体においてそれぞれの位格は完全な神であり、またこれら三つの位格が一なる神であることを。それは使徒信条（credo in deum）とニカエア信条（credo in unum deum）とアタナシオス信条（quicumque vult）の三信条に含まれているようにである。また父と子と聖霊は唯一なる神（神について私たちは語っているのだが）であり、創造主であり造物主であり、支配者であり、諸天と空気中と水中と地上の、見うるもの見えざるものすべてをふさわしい空間と時間に配置された方であることを私は心と口で信じ確認します。

私たちは唯一にして同一の神が、新約と旧約、すなわち、モーゼと預言者たちと使徒たちの法をつくられた方であることを信じます。その神は、三位一体において、すでに述べたように、万物を創造されました。洗礼者ヨハネは神に遣わされ、聖にして正しく、母の胎内におい

て聖霊に満ちていたことを信じます。私たちは次のことを心において信じ口によって告白します。すなわち神の受肉は、父なる神においてなされたのではなく、聖霊においてなされたのではなく、御子においてのみなされたのであると。またその方は神性においては父なる神の御子であり、父なる神によって真の神であり、母によって真に人間になられ、母の胎より真の肉体を受け、人間の理性的魂を受けられたことを。また彼においては、神と人との二つの本性が同時に存在するが、一なる位格であり、一なる御子であり、一なるキリストであり、父と聖霊とともに一なる神であり、万物の支配者で創造者であり、童貞マリアの肉体の真の出産によって生まれられたことを。また食事をされ飲まれ眠られたことを。また旅に疲れられ旅に休まれたことを。また肉体において、真に御受難をされ、肉体の真の死によってなくなられ、肉体の真の復活と、魂の真の贖罪によって復活し、復活されて後食事をされ飲まれ、天上に昇られ、父なる神の右側にすわられ、神の右において生者と死者とを裁かれるであろうことを。私たちは心によって信じ口によって告白します。

私たちは唯一のカトリック教会、使徒的で汚れなき、その外では何者も救いを得ることができない教会を信じます。また秘跡を信じます。教会において、聖霊のはかり知れない見えざる力がともに働いてとり行なわれた秘跡を、たとえ罪ある司祭によって執行されたとしても教会が彼を受け入れる限りは、決して拒絶しません。また私たちは罪ある司祭によってとり行なわれた教会の聖務と祝福をも決してさけず、あたかも最も正しい司祭によってとりおこなわれたのように愛の心をもって私たちは受け入れます。それ故に、私たちは幼児洗礼を認めます。幼児が洗礼を受けて罪を犯す前に死んだならば、彼らは救われると告白し信じます。真の洗礼において、すべての罪は、原罪も彼自身の意志によって犯された罪も除かれることを私たちは信じます。また司教の行なう堅信すなわち按手も、聖であり尊いものとして受け入れらるべきことを受け入れます。聖体すなわちパンとブドウ酒が、聖別の後はイエス・キリストの肉と血であることを、また私たちは堅く信じ、全く信じます。心で痛悔し、口で告白し、聖書に従ってつぐないの業を行なう罪人たちが、神の赦しを得ることができることを私たちは認め、彼らと自由に交わりを結びます。私たちは聖別された油による終油を尊びます。私たちは肉体的結婚が使徒の教えに従って結ばれるべきことを否定せず、真に正規に結

ばれた結婚の解消を禁じます。また再婚を非難しません。私たちは教会における品級を、すなわち司教職と司祭職とその他のその上の品級その下の品級を、謙遜に讃え誠実に尊びます。また教会において正規に朗されあるいはうたわれるものすべてを謙遜に讃え誠実に尊びます。私たちは悪魔が神の創造によってではなく、悪魔自身の悪しき意志によってつくられたことを信じます。私たちは肉を食べることを断罪しません。私たちは他の形ではなく私たちの肉身の復活を心で信じ口で告白します。私たちは最後の審判において、各人がこの肉体にあった間になしたことに対して報賞あるいは罰をうけるであろうことを堅く信じ認めます。私たちは信者によるほどこしとささげものと他のいくつかのよいわざが死者の益となることを疑いません。そして、信仰は、使徒ヤコブによれば、「わざがなければ死んだものである」から、私たちは世俗を捨て、そしてかつて私たちが所有していたものを、神が助言されたように、貧者たちに与え、私たち自身貧者となりました。それは、私たちが明日のことを思い煩うことなく金も銀も受け入ることはなく、他の人からの日々の糧と衣服以外何も受け入れないようにです。私たちはまた福音の助言を、あたかも掟のようにまもって生きることを企てます。しかしながら、世俗にとどまり、財産を所有し、自らの財産から慈善と他のよき行ないをし、主の掟をまもる人々がまた救われるであろうことを私たちは告白し信じます。それ故にあなたに私たちは次のように強く主張します。もしある人々があなたの前にやってきて、私たちの仲間であると主張するようなことがあったにしても、もし彼らがこの信仰告白を認めなければ、彼らが私たちの仲間ではないことを確実に知っていただきたいのです。」[24]

この信仰告白の成立については、トゥーゼリエは、*Statuta Ecclesiae Antiqua* という聖職叙任の際に異端の嫌疑を晴らすために用いられた五世紀のものに、当時の対カタリ派異端の教説を加えて教皇庁で起草され、それにヴァルデス派固有の条項が加えられたものであると推測している。[25] つまり、ここにはヴァルデスの信条のみならず、カタリ派、仮現論、またサベリアヌス派などの古代からの様々の異端教説の誓約の上での否定が含まれて、ヴァルデス固有の問題はごく限られたものであり、信仰告白の後ろの部分に集中している。ここで誓われているのは、使徒の章句の引用であり、「神の助言に従って」であり、福音書の引用である。ここでは教会当局と

かわした文書であるから「使徒が生きたように」という表現は出て来ないが、他の前述の諸史料等からして、ヴァルデスの目標は使徒的生活であったことは確実である。何故に使徒を模倣するべきなのだろうか。それは彼らこそが、オリジナルな形でのキリスト教徒だからである。キリストの人性が強調された時代にあっては、人間としてのキリストに最も近かった人々こそが、最も完全な救済への模範として受け入れられたからである。[26] それではヴァルデスの「使徒的生活」とは実践的にはどのようなものだったのだろうか。

それを端的に表しているのは、イギリスの聖職者ウォルター・マップの *De nugis curialium distinctiones* *onbone* であろう。彼は第三ラテラノ公会議に出席しており、この記録は一一八二年から一一九二年の間に書かれたものである。

「私は教皇アレクサンデル三世主宰のローマでの公会議でヴァルデス派を見た。彼らは無学文盲で、ローヌ川沿いのリヨン市民である指導者ヴァルデスにちなんでこのようによばれる。ヴァルデス派はガリアの言葉でしるされた書物を教皇に提出した。それには詩篇と新旧約聖書の多くの本文と註解が含まれていた。彼らは説教の委任が自分たちに認められるように要求した。彼らはろくにわかっていないのに、自分たちがよくわかった者のように彼ら自身には思われたからである。……私は公会議に召集された何千もの人々のうち、最も劣る者ではあるが、彼らヴァルデス派のことを笑った。というのは彼らの請願について論議と疑いが生じたからである。教皇から信仰告白の任務を課せられたある大司教に呼ばれ私は矢の的として座った。法律の専門家、思慮ある人々の数多くいる中を、二人のヴァルデス派の者が私の前に連れてこられた。彼らはその分派の指導者にみえた。彼らは私とともに討論することになった。しかし彼らは真理を見い出そうと望んでいるのではなく、私が何か悪しきことを言ったかの如く困惑して口を閉ざすことをもくろんでいるのだ。司教は既に準備のできていた私に彼らを吟味するように命じた。まず私はひじょうに簡単な質問をした。どんな人にも知られているような質問だった。ロバがアザミを食べる時、その口はとるにたらないチシャをも食べるということを私は知っていたからである。「おまえたちは父なる神を信じるか。」彼らは答えた。「私たちは信じます。」「子なる神は。」彼らは答えた。「信じます。」「それでも聖霊は。」彼らは答えた。「信じます。」私

はくり返した。「キリストの母は。」彼らは同じように「信じます。」すべての者にたいへんな大声で嘲笑され、彼らは混乱しながら去っていった。それは正当なことだ。誰からも正しく導かれていないのに、指導者になることを彼らは熱心に志したからである。馬の名前を知らなかったパエトーンのように……。

彼らは定まった住居をどこにも持たず、二人で組んで裸足でまわり、羊の毛をまとい、使徒たちのように何もまたず、すべてを共有とし、裸で裸のキリストに従った。今彼らは最も足るに足らない方法で始めたが、それは彼らが足を踏み入れることを知らなかったからである。もし私たちが彼らのことを放任していたならば、私たちは追い出されるであろう。信じない者は、このような方法で説教されていることを聞くべきである。[27]」

一二二六年書かれたとされる *Chronicon Ursperge-nsis* にもまたいくつかの点で疑問がないわけではないが、ヴァルデス派の初期の様々が記されている。一二一三年の記事を引用してみよう。

「私たちはその時リヨンの貧者とよばれる者たちのうち何人かが、ベルナルドゥスという指導者とともに、教皇座に現われたのを見た。彼らは自分たちの分派が教皇座によって認可され、特権を受けることを要求した。彼らは自分たちが使徒たちの生活をおくっていると称し、何かを所有することも定住することも望まず、村々や城々をめぐっていた。しかしながら教皇は彼らの行状のうち、いくつかの迷信的なものを禁じた。すなわち、脚のあたりできれたサンダルをはくこと。なかば裸足で歩きまわること。さらに修道士のようにある種の頭布をかぶりながら、平信徒のように頭の毛を刈ること。また恥ずべきことであるが彼らの間で見られたことで、男も女も一緒になって道を往き、多くの場合、同じ家の中で暮していたこと。さらに彼らについていわれていることだが、一緒になって寝台に横たわることである。しかしながら、これらすべてのことが使徒たちに由来すると彼らは確信していたのである。[28]」

このウォルター・マップとウルスペルゲンシス年代記の証言と、前に挙げた諸史料の叙述などから判断すると、ヴァルデス派の初期の生活は、

㈠ 定まった住居をもたない。

㈡ 二人で組んで裸足であるいはサンダルで移動する。

㈢ 無所有で、すべてを共有にする。

(四) 道端などあらゆる所で説教をする。
(五) 男女から成っていた。
(六) 羊の粗毛でできた衣服を着る。

等が考えられうるであろう。

しかし、これらの事項を考えてみると、ヴァルデス派に先行する異端、あるいは巡歴説教者との類似に気づかざるをえない。例えば、一一四三年にスタインフェルトのエヴェリヌスがクレルヴォーの聖ベルナルドゥスに宛てた書簡に叙述されている異端者である。この異端は明らかにカタリ派の影響をうけて教義的にも正統とはいえないが、その実践の類似は注目すべきものである。

「彼らの異端は次のようなものである。(彼は次のように言っている) 教会は彼らの間にのみ存する。なぜならば彼らのみがキリストの足跡をたどり、真に使徒的な生活を続け、この世のものを求めず、家も土地も何の財産も所有しないからである。それは御自身何も所有せず、弟子たちにも所有することを許されなかったキリストのようにであると。……彼ら自身について彼らは言う。『私たちキリストの貧者は、定まった住居をもたず、町から町へと巡歴し、狼の間の羊のように使徒と殉教者とともに迫害に耐えている。にもかかわらず、私たちは断食と節制のうちに聖なる厳格な生活をおくっており、日夜祈りと労働を絶やさず、労働からは私たちの生を維持するのに必要なものだけを求めている。これを私たちは実行している。なぜならば私たちはこの世の人間ではないからだ……。』」(29)

この異端については注意と留保の必要はあるが、それではローザンヌのヘンリクスの異端はどうであろうか。これは一一一六年頃のルマンでの事件である。

「ほぼこの頃一人の偽善者が隣接地域との境界付近にあらわれた。彼の行動、逸脱したモラル、嫌悪さるべき教えは、親殺しの刑罰に用いられるさそり形のむちで彼が罰せらるべきことを示していた。彼は羊の皮で貪欲な狼の狂暴さをかくし、やつれた顔をし、眼の激しさは難破した男のようであり、髪の毛はくくられ、髯はそらず、丈高く、歩きぶりは速く、冬の最中でも裸足で歩いた。彼はつねに説教をしようとする若い男で、恐るべき声をしていた。彼の衣服はみすぼらしく、彼の生活は明らかに世の常とは異っていた。彼は町の家々に泊まり、彼の家は玄関であり、彼の床は食堂の中だった。しかし、どうなったであろうか。彼は並はずれた聖性と学識の功績によるのではなく噂によって、つまり偽りによってであ

って決して彼の態度ではなく、いたるところで有名になった。決して行状や信仰ではなく、うわさによってである。女性と少年たちが――なぜならば彼は両性をも肉欲に用いたからであるが――何度も彼と親しみ、公然と自らのゆきすぎを誇示し、さらに彼の足の踵と尻と鼠蹊部とを柔かい指で愛撫した。彼らはこの男の放縦と、彼ら自身の罪のひどさにより興奮したため、彼らは彼の並はずれた剛直さ、人間性、強さに自らふれたと公然と証言し、彼の雄弁は石の心さえも激しい悔恨へと動かしうると言い、すべての修道士や律修参事会士たちは彼の敬虔で貞潔な生活を模倣すべきであると言った。また旧約の預言者たちに与えられた真の祝福と霊を神が彼に与えられたと彼らは主張した。そして、彼らの表情に、他の人の知らぬ罪を彼は見い出し彼らに告げたと主張した。[30]」

ここには禁欲的な巡歴説教師の姿がうかがわれる。このような運動につきもののオルギー的非難を除くならば、男女を問わぬ支持者たちがつきしたがっていたこともわかる。ここにはやはり類似が認められるであろう。

しかし、それではヴァルデスの使徒的生活とヘンリクス等の使徒的生活とは何らの相違もないのであろうか。正統的信仰に関するものを除いても明確な相違が一つあると思われる。それは、清貧のもつ価値観である。ヴァルデスにおいては、清貧が絶対的なものとなっているのである。それ故ヴァルデスは手労働を禁じた。それは前述の *Rescriptum* の主張からも明らかである。清貧は聖職者の豪華さに対する攻撃の手段ではなく、教会だけの問題ではなくなったのである。全てを放棄することはただ神のことに専心する救いの道になったのである。

貧者の中のキリストが新しく前面に出てきている。ヴァルデスの支持者ドゥランドゥスは著書 *Liber Antiheresis* の中で次のように述べている。

「私たちの道は全く新しいものであるが、それが新約の権威によって確かめられることを知っている。私たちの信仰と行ないは福音によって保証されているのだ。もしあなた方が、なぜに私たちが清貧なのかとたずねたらば、私たちは次のようにこたえる。我らが主とその使徒たちが清貧であったことを読んだからであると。」

限られた人々のためではなく、多くの人々に救いへの手段を提供した。そして平信徒であるヴァルデスが始めた運動であることが何よりも重要である。ここに新しい「宗教人口」が生じた。平信徒である彼はここに民衆のイマージネーションに語ることができたのである。[13]

しかし、ヴァルデスの運動は新しいばかりではない。「使徒的生活」という表現自体は長い歴史をもっているのである。M・D・シュニュ、ヴィケール等の研究から明らかなように[32]、「使徒的生活」とは使徒行伝四章三十二―三十五節等に叙述されているように、使徒たちがまもり、また使徒の教えを受けた初代教会の信者たちのまもった生活とされており、今日のように救霊の職にのみ適用されるものではなかった。さて、このような使徒的生活とはカッシアヌス等を通じて西欧教会に導入され、中世前期においては共住生活 vita communis、特に修道制を意味していた。しかし、使徒のように生活することは、またマテオ福音書において命じられているように福音を告げ知らせることであった故に、修道制の中には自己完成を主たる目的とはするものの、同時に自分たちの生活あるいは得たものを世界に広めようという欲求も存在したのである。いわば修道制には世界を「修道院化」しようという計画をも内包されていたといえよう。

また同時に、中世盛期にかけて、キリストの人性がより強調されるようになっていった。絵画表現における「栄光のキリスト」から「苦難のキリスト」への変化はその典型的な表われであろう。そしてまたキリストによるあがないが中心的テーマになっていった。聖体の実体変化説が定着し始めると、それを聖別し秘跡を執行する者、つまり司祭職の上昇がみられるようになった。このことは司祭聖職者と一般平信徒の分離を生じせしめたであろう。そして、修道士よりも彼ら聖職者こそが、使徒の後継者であるという主張が生じてくるのである。彼らもまた共住生活をおくり、また同時に修道士たちよりも他者に対する義務あるいは配慮が若干顕著であったにしても[33]共住生活をおくっていたのである。

巡歴説教運動はこれらの「使徒的生活」の主張のある表われなのである。彼らの指導者の多くは聖職者あるいは修道士出身であった。福音の命令に基いてそれを周く広めようとしたのである。当時の社会変化は社会的移動性やコミュニケーションを拡大した。定住的な聖職者でさえもその例外足りえない。その具体的表われは、オーリヤックのゲルベルトゥスであろう。彼は知識を求めてヨーロッパ各地をめぐり歩いたのである。ヴィオランテの言うように、巡歴性は当時の心性に適合したものであった。[34]各地にこのような人々が出現した。

ヴァルデスの運動は、このような「使徒的生活」の運動の一環に位置づけられるものである。同時にその「使

徒的生活」という概念そのものが変化してきているのである。彼ヴァルデスはそれを先行する人々から受けついだ。それが唯一、彼の霊的欲求を満足せしめるものだったからである。他に選択肢はなかったのであろうか。例えばシトー会などの助修士はどうであろうか。ヴァルデスのような単なる平信徒にとっては満足できないものであったろう。正規の修道士と助修士の間には歴然とした差異が存在した。その基準は、ラテン語が使えるかどうかなのである。ここでも「無学文盲」はより低い役割を与えられるのみである。「最近回心した助修士は修道士たちが聖体を拝領するのを見、同時にそのことが自分に許されていないことを知った。祭壇の前で彼は欲求のためいきをしばしばついた。」[35]という。

それ故に、自ら財産を放棄し、貧者となることにより、宗教的な生活をおくるという新しい「使徒的生活」は彼にとって、また霊的救いを求める人には最善の道と思われたであろう。そしてまた最善の道であるとリヨンの神学者に助言されたのである。

ここに平信徒にとり新たな霊的道の可能性がひらけたのである。しかしそれは平信徒が平信徒であることを否定することによってのみえられる道であり、世俗逃避、財産放棄など古くからの禁欲を行なうことによって可能であった。平信徒としての宗教生活、世俗内での宗教生活はまだ遠いのである。例えばクレモナの聖オモボーソなどのように商人としての生活をつづけながら聖人とされるようなものでもない。あるいは「デヴォティオ・モデルナ」のようでもない。ヴァルデスの運動は平信徒にとっての新しい道の模索であったが、その解決は平信徒であることを放棄することによって可能となったのである。[36]

さらに考えてみれば、ヴァルデスの運動のもつこのような性格こそが、当時の教会構造においては排斥さるべき理由をつくり出したのであろう。

今までにあげたヴァルデス派に対する非難に常にあらわれてくる表現がある。つまりそれは「横領者 usurpantes」と「いつわりの聖性」である。オルギー的異端という彼らに対する断罪はあまり問題にならない。実際にあったかもしれないが、それよりも秘密的性格をもつ集団、原始キリスト教あるいはユダヤ人たちに対しても常に用いられる表現だからである。このような非難がくりかえされたのは「使徒的生活」が聖職者や修道士などごく限られていた人々にのみ許されていたからであ

る。ここには明確にオルド侵害が問題になっている。

教会論は大変微妙な問題である。それは一つには教会は超時代的に存在するものであるとともに、やはり歴史的存在として、デュビーが主張するように変化せざるを得ないからである。[37] それ故にここでは多くの点で留保せざるをえない。正統的教会論についての研究などとともに私の今後の課題である。しかし、若干この問題に言及するべきだろう。

以下はヴァルデスが一一八〇年に信仰告白した際のシトー会修道院長ゴドフリドゥスの記録である。

「すばらしいガリア地方からは、『ガリアには怪物はいない』という古代の推賞の特権は、再びとりのけられ軽視されねばならない。ガリア首座大司教座リヨンは新しい使徒たちを生み出し、その使徒たちとまた結びつくのを恥じなかったのである。主のブドウ畑を荒らすために子狐どもが侵入し、軽蔑さるべき全くふさわしからざる人物たちが、説教の職位を横領した。完全にあるいはほとんど文字も読めぬのに、あるいはむしろ霊がないのにもかかわらずにである。「動物たちは霊を持たない。Animales, Spiritum non habentes」からである。彼らは町々と村々をめぐり、清貧の装いと説教の口実の下に、恥ずることなく、手労働をせずに他の人々のパンで生きている。御言葉を組み合わせ選び出し、彼らは自分たちの舌をふるって新しいオウムとなっているが、自分たちが語り確信していることに何も知らないのである。[38]」

この後の部分にヴァルデスの abjuratio の叙述が続くわけであるが、より重要なのはここにあげた部分であろう。ヴァルデス破門後に書かれたものではあるが、ここには典型的にヴァルデスに対する聖職者の一つの態度が表われているのである。もちろん、このような態度ばかりではない。第三ラテラノ公会議でのアレクサンデル三世の抱擁などに示される好意的態度も存在する。しかし、ヴァルデスは「怪物」であり、「動物」であり「霊をもたない」のである。そして「主のブドウ畑を荒す小狐」なのである。

この時期の教皇令には「異端はあってしかるべし」という章句はあらわれない。出てくるのは、小狐の比喩である。[39] クレルヴォーのアルケルスの三分論によれば、Rustici と artifices には animales seu sensuales sensus が割りあてられている。[40] ここでも一般平信徒には animales という表現が用いられている。結論は明らかであろう。彼らの実践的行動の正しさは問題にならない。た

だ各人はそれぞれのオルドにふさわしい行動をするべきであり、[41] オルドからはずれた者は「怪物」なのである。それ故に、信仰生活を求める平信徒は「怪物」なのであろう。そしてその行動はいかなるものであろうと「いつわりの聖性」なのである。

もちろん、ここにおいて私は西欧中世の教会の保守性を指摘する意図は全くない。すべて歴史的存在（教会もある一面においてはそれをまぬがれえないだろう）の必然であり、またコンガールのいうように、オルド論の変容によって各人は西欧社会において各人固有の位置を占めることができたのだろう。[42] そして貧者というオルドさえも生じたのである。[43] しかし、同時に、このオルド論は、コンガールも認めるように、[44] 機能についてであり個人の問題ではないといえよう。その与えられた役割が問題なのである。ヴァルデスの回心は、役割によらぬ自己の存在の希求の表われと受けとれないだろうか。

以上、ヴァルデスの回心をある展望に位置づけようと試みてみた。ヴァルデスの運動は当時の宗教生活のある交叉点に位置し、いわば一つの窓といえるかと思う。「ヴァルデスがいなければ聖フランシスコは存在しなかっただろう」とは言わない。しかし彼の運動は、新しいある均衡を求める動きの一環であることは確実である。新しい層の宗教生活への欲求。それに対する反発。そしてその統合と均衡。アッシジの聖フランシスコが助祭というオルドを受けたということは平信徒運動が教会内での一つの地位を得、それが第三会や兄弟団などのような形態を生み出すことの、つまり一つのある均衡の象徴的表われであろう。その意味で、ヴァルデスの回心はこの動きの方向をよく示す例であると私は思うのである。

註

(1) B. Marthaler, "Forerunners of the Franciscans: The Waldenses", in *Franciscan Studies*, vol. 18, (1958) pp. 133-142.

(2) F. M. Bak, "If it weren't for Peter Waldo, there would have been no Franciscans", in *Franciscan Studies*, vol. 25, (1965) pp. 4-16.

(3) ヴァルデスが実在しない、あるいは中興の祖にすぎない、ヴァルデス派はコンスタンティヌスの時代までさかのぼりうるという主張が後のヴァルデス派の中で生じた。これについては、G. Gonnet, "Waldensia" in *Revue d'Histoire et de la Philosophie Religieuses* (R. H. P. R.) 1953, pp. 202-254 参照。

(4) M.G.H. SS., t. XXVI pp. 447–449. 坂口昂吉「アッシジのフランシスの清貧理念と社会環境の関係」史学第四十五巻 pp. 295–297, Ph. Pouzet, "Les Origine sde la secte des Vaudois", in *Revue d'Histoire de l'Eglise de France*, t. XXII. (1936) pp. 8–10, R. I. Moore, *The Birth of Popular Heresy*, (London, 1975) pp. 111–113 参照。

Currente adhuc anno eodem, scilicet 1173. dominice incarnationis, fuit apud Lugdunum Gallie civis quidam Valdesius nomine, qui per iniquitatem fenoris multas sibi pecunias coacervaverat. Is quadam die dominica cum declinasset ad turbam, quam ante ioculatorem viderat congregatam, ex verbis ipsius conpungtus fuit, et eum ad domum suam deducens, intente eum audire curavit. Fuit enim locus narracionis eius, qualiter beatus Alexis in domo patris sui beato fine quievit. Facto mane, civis memoratus ad scolas theologie consilium anime sue quesiturus properavit; et de multis modis eundi ad Deum edoctus, quesivit a magistro, que via aliis omnibus cercior esset atque perfeccior. Cui magister dominicam sentenciam proposuit: *Si vis esse perfectus, vade et vende omnia que abes* etc. Et ad uxorem veniens, dedit ei opcionem ut sibi mobilia vel immobilia omnium que habebat, in terris scilicet et aquis, nemoribus et pratis, in domibus, reditibus, vineis, necnon in molendinis et furnis, eligeret retinendum. Que licet multum contristata, quia id facere oportuit, inmobilibus hesit. Ille vero de mobilibus his a quibus iniuste habuerat reddidit, magnam vero partem pecunie sue duabus parvulis filiabus contulit, quas matre earum ignorante ordini Fontis-Evrardi mancipavit; maximam vero partem in usus pauperum expendit. Fames enim permaxima tunc grassabatur per omnem Galliam atque Germaniam. Valdesius vero civis memoratus per tres dies in ebdomada a pentecosten usque ad vincula sancti Petri cuntis ad eum venientibus panem et pulmentum cum carnibus largiebatur. In assumpcione beate virginis quandam summam pecunie per vicos inter pauperes spargens, clamabat dicens: 'Nemo potest duobus dominis servire, Deo et mammone'. Tunc accurrentes cives arbitrati sunt, eum sensum perdidisse. Et ascendens in loco eminenciori, ait: 'O cives et amici mei! non enim insanio, sicut vos putatis, sed ultus sum de his hostibus meis, qui me sibi fecerunt servum, ut semper plus essem

sollicitus de nummo quam de Deo, et plus serviebam creature quam Creatri. Scio, quod me reprehendent plurimi, quod hoc in manifesto feci. Sed propter me ipsum et propter vos hoc egi: propter me, ut dicant qui me viderint possidere deinceps pecuniam, me amentem esse; set et propter vos hoc feci in parte, ut discatis in Deum spem ponere et non in diviciis sperare'. Sequenti vero die rediens de ecclesia, a quodam cive, quondam socio suo, peciit dari sibi ad manducandum pro Deo. Ille ad hospicium eum deducens, ait: 'Ego quoad vixero concedo vobis necessaria'. Que res cum pervenisset ad noticiam uxosis eius, von mediocriter contristata, sed velud amens effecta, ad archiepiscopum urbis cucurrit, et conquesta, quod scilicet vir eius panem ab alio quam ab ea mendicasset. Que res omnes qui aderant cum ipso presule commovit ad lacrimas. Tunc ex precepto presulis Burgensis hospitem suum secum ad presulis presentiam duxit. At mulier arripiens virum suum per pannos, ait: 'Numquid melius est, o homo, ut ego in te peccata mea helemosinis redimam, quam extranei'? Et extunc non licuit ei ex precepto archiepiscopi in ipsa urbe cum aliis cibum sumere quam cum uxore.

Anno gracie 1177.....Waldesius civis Lugdunensis, de quo superius dictum est, facto voto Deo celi se de cetero in vita sua nec aurum nec argentum possessurum nec de crastina cogitaturum, cepit habere sui propositi consortes. Qui eius exemplum secuti, cunta pauperibus largiendo, paupertatis spontanee facti sunt professores. Ceperunt paulatim tam privatis quam publicis ammonicionibus sua et aliena culpare pacceta.

Anno gracie 1178. Concilium Lateranense a papa Alexandro huius nominis tercio celebratur. ..... Dampnavit hoc concilium hereses et omnes hereticorum fautores necnon et defensores. Waldesium amplexatus est papa, approbans votum quod fecerat voluntarie paupertatis, inbibens eidem, ne vel ipse aut socii sui predicacionis officium presumerent nisi rogantibus sacerdotibus. Quod preceptum modico tempore observaverunt; unde extunc facti inobedientes, multis fuerunt in scandalum et sibi in ruinam.

(5) *De septem donis Sancti Spiritus* のラテン語テクストを入手することができなかったのでここでの翻訳は Ph. Pouzet, loc. cit., pp. 10–11 のフランス語訳から重訳である。他の文書のテクストとの比較のため、幾つか

の研究書の註などからひき写したものを記しておく。

: Waldenses dicti sunt a primo huius haeresis auctore qui nominatus fuit Valdensis.....secundam quod ego [audivi] .....a sacerdote illo.....qui dictus fuit Bernardus Ydros; qui cum esset juvenis et scriptor, scripsit dicto Valdensi priores libros pro pecunia in romano quos ipsi habuerunt, transferente et dictante ei quodam grammatico dico Stephano de Ansa.....quem vidi sepe.

Quidam dives rebus in dicta urbe dictus Waldensis, audiens evangelia, cum non esset multum litteratus, curiosus intelligere quid dicerent, fecit pactum cum dictis sacerdotibus, alteri ut transferret ei in vulgari, alteri ut scriberet que ille dictaret quod fecerunt. similiter multos libros Biblie et auctoritates sanctorum multas per titulos congregatas, quas sentenciae appellabant. ..... multos homines et mulieres ad idem faciendum ad se (convocavit) firmans eis evangelia quos eciam per villas circumjacentes mittebat ad praedicandum vilis simorum quorumcumque officiorum.....Cum autem ex terminate sua et ignorancia multos errores et scandula circumquaque diffunderent, vocati ab archiepiscopo Lugdunensi, qui Iohannes vocatus, prohibit eis ne intromitterent se de scripturis exponendis vel predicandis. Ipsi autem recurrentes et responsionem Apostolorum et magister eorum usurpans Petri officium, sicut ipse respondit principibus sacerdotum ait: Obedire oportet magis Deo quam hominibus qui praeceperat Apostolis praedicare Evangelium omni creaturae. .....Postea in Provincie terra et Lumbardie cum aliis hereticis se admiscentes et errorem eorum bibentes et serentes. heretici sunt iudicati ecclesie infestissimi, infectissimi et periculosissimi, ubique discurrentes.

(6) K. Selge, "Caractéristiques du premier mouvement vaudois et crises au cours de son expansion" (*Caractéristiques*), in *Cahier de Fanjeaux* (*C. F.*) *2*, pp. 110–142.

(7) G. Gonnet, "La figure et l'oeuvre de Vaudès dans la tradition historique et selon les dernières recherches", in *C. F. 2*, p. 93, Ch. Thouzellier, *Catharisme et valdéisme en Languedoc*, (Paris, 1965) p. 27.

(8) Ph. Pouzet, loc. cit., p. 30 および n. 75 参照。

(9) モネタの記録によると、「彼は教皇のところにやって来て、四人の博士、すなわちアンブロシウス、アウグスティヌス、グレゴリウス及びヒエロニムスをもあること

を約束した。……そして説教の職務を教皇から受けとった。」という。Ph. Pouzet, loc. cit., p. 17, Ch. Thouzellier, op. cit., p. 25, n. 46 参照。

(10) Ch. Thouzellier, op. cit., p. 17, n. 19 参照。Gratianus, *Decreum*, XXIII, C. 23: Laicus autem, presentibus clericis nisi ipsis rogantibus, docere non audeat.

(11) K. Selge, loc cit., p. 115 および G. Gonnet, *Enchiridon Fontium Valdensium* I (*E. F. V.*), (Torre Pellice, 1958) pp. 96–100 および "*caratéristiques*" p. 99 参照。

(12) I. von Döllinger, *Beiträge zur Sektengeschichte des Mittelaters*, t. II, Documente (München. 1890) (rep. New York 1970) pp. 6–7.

Valdenses, sive Pauperes de Lugduno. Hi inceperunt c. annum 1170; ortum habuerunt a cive quodam Lugduni Valdesio vel Valdensi, qui dives rebus exstitit, et relictis omnibus proposuit servare paupertatem, et perfectum evangelium, sicut apostoli servarunt, et cum fecisset conscribi sibi evangelia et aliquos alios libros de biblia in vulgari Gallico, et etiam aliquas authoritates S. Augustini, Hieronymi, Ambrosii, Gregorii ordinatas per titulos, quas ipse et sequaces sui sententias appellarunt, ea saepius secum legentes et minus sane intelligentes, sensu suo inflati, cum essent modice literati, apostolorum sibi officium usurparunt, praesumentes per vicos et plateas evangelium praedicare, et Valdesius multos homines utriusque sexus complices sibi fecit ad similem praesumtionem, ipsos ad praedicandum tamquam discipulos emittebat, qui cum essent idiotae et illiterati, per villas discurrentes et domos penetrantes, tam viri quam mulieres in plateis ac etiam in ecclesiis, viri etiam maxime praedicantes multos errores circumquaque diffuderunt. Quod cum Archiepiscopus Lugdun. Jo. de Belles-mains ipsis interdiceret, dixerunt, Deo magis obediendum esse quam hominibus, et Deum jussisse Apostolos, ut evangelium annunciarent omni creaturae——aspernantes Praelatos et clericos, quia divitiis abundabant et in deliciis vivebant. ——Exinde excommunicati ex illa civitate et patria sunt expulsi——sic multiplicati super terram, disperserunt se per illam provinciam et per partes vicinas et confines Lombardiae, et praecisi ab ecclesia, cum aliis haereticis se miscentes et eorum errores imbibentes suis adinventionibus antiquorum haereticorum errores et haereses miscuerunt. —— Insabbatati dicti sunt, quia olim de principio sui

Valdenses perfecti spirituale signum in modum scuti in parte superiori sotularium deferebant.

(13) G. Gonnet, *E. F. V.*, pp. 164–166.

.....Circa annum Domini MDLXX (これはおそらくはMCLXXの誤りであると思う。) incoepit secta et haeresis illorum, qui dicuntur Valdenses, seu Pauperes de Lugduno, cujus auctor et inventor fuit quidam civis Lugdunensis nomine Valdensis, a quo sectatores ejus fuerunt taliter nominati, qui dives rebus extitit, et relictis omnibus, proposuit servare paupertatem, et perfectionem Evangelicam sicut Apostoli servaverunt. Et cum fecisset sibi conscribi Evangelia, et aliquos libros Bibliae in vulgari et nonnullas auctoritates Sanctorum, quas Summas appellavit, ea saepius secum legens, seusu suo inflatus, cum esset modicus literatus, Apostolorum sibi officium usurpavit, atque praesumpsit, per vicos et plateas Evangelia praedicando, multosques homines et mulieres ad similem praesumptionem complices sibi fecit, quos ad praedicandum tamquam discipulos emittebat; qui cum essent idiotae et illiterati, per villas discurrentes, et domos penetrantes, multos errores circumquaque diffuderunt, et vocati ab Archiepiscopo Lugdunensi

Domno Johanne Beles-Mayns probihiti sunt ab eodem, sed obedire minime voluerunt, velamen suae vesaniae praetendentes, et dicentes, quod oportet magis Deo, quam hominibus obedire, quae praecepit Apostolis: omni creaturae Evangerium praedicare, arrogantes sibi quod Apostolis erat dictum, quorum imitatores et successores falsa pauperitatis professione, et ficta Sanctitatis imagine se esse profitebantur aspernentes Clericos et Presbyteros. Sic itaque ex praesumptuosa usurpatione officii praedicandi inobedientes, deinde contumaces, et exinde excommunicati ab illa patria sunt expulsi. Demum vero convocati ad Concilium, quod fuit Romae ante Lateranense celebratum, fuerunt pertinaces et Schismatici judicati. Sicque dispersi per provincias, et in confinibus Lombardiae cum aliis haereticis se miscentes, et eorum errores bibentes et sectantes, fuerunt haeretici judicati, quorum errores et haereses alibi sunt vocati.

(14) G. Gonnet, "*caractéristiques*", pp. 101–102 参照。

(15) L. K. Little, "Social meaning in the monastic and mendicant spiritualities", in *Past & Present* (1974), pp. 17–18 等参照。

(16) 例えば、Ponce de Chaponnay とよばれる13世紀初

頭の代表的商人は、遠距離交易で一代で財産を築き上げ、城と領地を所有しブルゴーニュ公妃に貸付けを行なっていたという。*Histoire de Lyon et du lyonnais* (sous la direction de A. Latreille) (Toulouse 1975), p. 95.

(17) M. Mollat, "Le problème de la pauvreté au XIIe siècle", in *C.F.* 2, pp. 31–32.

(18) L. K. Little, *Religious Poverty and Profit Economy in Medieval Europe*, (*Religious Poverty*) (London, 1978) p. 211.

(19) G. Gonnet, *E. F. V.*, pp. 169–183.

(20) M. Deanesly, *Lollard Bible*, (Cambridge, 1966) p. 19.

(21) R. Manselli, *Studi sulle Eresie dei secolo XII*, (Roma, 1975) pp. 114–119.

(22) M. Esposito, "Sur quelques écrits concernant les hérésies et les hérétiques aux XIIe et XIIIe siècles," in *Revue d'Histoire Ecclesiastique* (1940) p. 159, n. 1, M. D. Lambart, *Medieval Heresy*, (London, 1977) pp. 76–77 参照。

(23) なぜほどこしが罪のあがないになるかといえば、そこには貧者を通じてキリストを見ていたからである。ヴァルデスは托鉢を禁じられたと一般には主張されるが、これは単に妻以外の人からの托鉢が禁じられただけである。それも托鉢がよくないからではなく、よいものであった故に、妻に寄捨の機会が与えられたのである。

ここにはそれ以前の返還という理念にかわり慈善という理念が生じているように思われる。つまり損害を与えた人間にその損害をつぐなうというのではなく、不特定の人々にそのつぐないを行なうという変化が生じている。そこに、この時代から見られる、新しい慈善のバイパスが生じてきているのである。またこれは当時の刑罰が、被害者の告訴なくば裁判が行なわれず、人命金などで解決していたものが、被害者の告訴なくとも裁判が行なわれるようになっていく変化と平行しているのではないかと思われる。

(24) G. Gonnet, *E. F. V.*, pp. 32–36.

In nomine patris et filii et spiritus sancti atque beatissime semperque virginis marie. Pateat omnibus fidelibus quod ego valdesius et omnes fratres mei, prepositis nobis sacrosanctis evangeliis, corde credimus, fide intelligimus, ore confitemur et simplicibus verbis affirmamus patrem et filium et spiritum sanctum tres personae esse, unum deum totamque deitatis trinitatem coessencialem et consubstancialem et coheternalem et coomnipotentem et singulas quasque in trinitate personas plenum deum, et totas tres personas unum deum, sict in

《credo in deum》, et in《credo in unum deum》, et in《quicumque vult》 continetur. Patrem quoque et filium et spiritum sanctum unum deum, de quo nobis sermo, esse creatorem, et factorem, et gubernatorem et loco congruo et tempore, dispositorem omnium visibilium et invisibilium, celestium et aeriarum, aquaticarum et terrenarum, corde et ore credimus et confitemur. Novi et veteris testamenti idest legis moisi et prophetarum et apostolorum, unum et eundemque et deum auctorem credimus, qui in trinitate, ut dictum est, permanens, omnia creavit, johannemque baptistam ab ipso missum esse sanctum et iustum et in utero matris sue spiritu sancto replenum. Incarnacionem divinitatis non in patre neque in spiritu sancto factam, sed in filio tantum, corde credimus et ore confitemur, ut qui erat in divinitate dei patris filius, deus verux ex patre, esset et home verux ex matre, veram carnem habens ex visceribus matris et animam humanam racionabilem, simul in eo utriusque nature, idest deus et homo, una persona, unus filius, unus christus, unus deus cum patre et spiritu sancto, omnium rector et auctor, natus ex virginis marie vera nativitate carnis; et manducavit, et bibit, et dormivit, et fatigatus ex itinere quievit; qui passus est vera carnis sue passione, et mortuus est vera corporis sui morte, et resurrexit vera carnis sue resurrectione et vera anime resumptione, in qua postquam manducavit et bibit, ascendit in celum, sedet ad dexteram patris et in eadem venturus est iudicare vivos et mortuos, corde credimus et ore confitemur. Unam ecclesiam catholicam, sanctam, apostolicam et immaculatum, extra quam neminem salvari, credimus Sacramenta quoque, que in ea celebrantur, inestimabili atque invisibili virtute spiritus sancti cooperante, licet a peccatore sacerdote ministrentur, dum ecclesia eum recipit, nullo modo reprobamus, neque ecclesiasticis officiis vel benedictionibus ab eo celebratis detraimus, sed benivolo animo tanquam a iustissimo amplectimur. Approbamus ergo baptismum infancium, ut, si defuncti fuerint post baptismum antequam peccata comitant, fatemus eos salvari et credimus. In baptismate vero omnia peccata, tam illud originale peccatum contractum, quam illa, que voluntarie comissa sunt, dimiti credimus. Confirmacionem quoque ab episcopo factam idest imposicionem manuum, sanctam et

venerandam accipiendam esse censemus. Sacrificium, idest panem et vinum, post consecrationem esse corpus et sanguinem ihesu christi, firmiter credimus et simpliciter affirmamus, in quo nichil a bono maius nec a malo minus perficitur sacerdote. Peccatoribus corde penitentibus et ore confitentibus et opere secundum scripturas satisfacientibus veniam a deo posse consequi concedimus, et eis libentissime comunicamus. Unctionem infirmorum cum oleo consecrato veneramur. Conjugia carnalia esse contrahenda secundum apostolum non negamus; contracta vero ordinarie, disiungere omnino prohibemus; nec etiam secunda matrimonia dampnamus. Ordines vero ecclesiasticos, idest episcopatum et presbyteratum et ceteros infra et supra, et omne quod in ecclesia ordinabiliter sanccitum legitur aut canitur, humiliter conlaudamus et fideliter veneramur. Diabolum non per condicionem sed per arbitrium malum esse factum credimus. Carnium perceptionem minime culpamus. Corde credimus et ore confitemur huius carnis, quam circumgestamus, et non alterius resurrexionem. Iudicum quoque futurum et sngulos pro his, que in hac carne gesserunt, recepturos vel premia vel penas, firmiter credimus et affirmamus. Helemosinas et sacrificium, ceteraque beneficia fidelibus posse prodesse defunc tis non dubitamus. Et quia fides secundum iacobum apostolum 《sine operibus mortua est》, seculo abrenunciavimus, et que abebamus, velut a domino consultum est, pauperibus erogavimus et pauperes esse decrevimus, ita ut de crastino solliciti esse non curamus, nec aurum nec argentum vel aliquid tale preter victum et vestitum cotidianum a quo quam accepturi sumus. Consilia quoque evangelica velut precepta servare proposuimus. Remanentes autem in seculo et sua possidentes, elemosinas ceteraque beneficia ex suis rebus agentes, precepta domini servantes salvari eos omnino fatemur et credimus. Qua propter discrecionem vestram omnino depossimus, quod si forte contigerit aliquos venire ad vestras partes dicentes se esse ex nobis, si hanc fidem non habuerint, ipsos ex nostris non fore pro certo sciatis.

(25) Ch. Thouzellier, op. cit., pp. 32–33.

(26) M.-H. Vicaire, *L'imitation des apôtres: moines, chanoines et mendiants* (*IVe-XIIIe siècles*), (Paris, 1963) pp. 10–11.

(27) G. Gonnet, *E. F. V.*, pp. 121–124, Ph. Pouzet loc. cit. pp. 14–15, E. Peters, *Heresy and Authority in Medieval Europe*, (London, 1980), pp. 144–146 参照。

: Vidimus in concilio Romano sub Alexandro papa tercio celebrato Valdesios, homines ydiotas, illiteratos, a primate ipsorum Valde dictos, qui fuerat civis Lugduni super Rodanum, qui librum domino pape presentaverunt lingua conscriptum Gallica, in quo textus et glosa Psalterii plurimorumque legis utriusque librorum continebantur. Hii multa petebant instancia predicacionis auctoritatem sibi confirmari, quod periti sibi videbantur, cum vix essent scioli. .....Ego multorum milium qui vocati fuerunt minimus, deridebam eos, quod super eorum peticione tractatus fieret vel dubitacio, vocatusque a quodam magno pontifice, cui eciam ille maximus papa confessionum curam iniunxerat, consedi signum ad sagittam, multisque legis peritis et prudentibus ascitis, deducti sunt ad me duo Valdesii, qui sua videbantur in secta precipui, disputaturi mecum de fide, non amore veritatis inquirende, sed ut me convicto clauderetur os meum quasi loquentis iniqua. .....Iussit me pontifex experiri adversos eos, qui respondere parabam. Primo igitur proposui levissima, que nemini licet ignorari, sciens quod asino cardones edente, indignam habent labia lattucam. 《Creditis in Deum Patrem?》 Responderunt, 《Credimus》. 《Et in filium?》 Responderunt, 《Credimus》. 《Et in spiritum sanctum?》 Responderunt, 《Credims》. Iteravi, 《In matrem Christi?》 et illi item, 《Credimus.》 Et ab omnibus multiplici sunt clamore derisi, confusique recesserunt, et merito, quod a nullo regebantur et rectores appetebant fieri, Phaetonis instar, qui nec nomina novit equorum.

Hii certa nusquam habent domicilia, bini et bini circueunt nudipedes, laneis induti, nihil habentes, omnia sibi communia tanquam apostoli, nudi nudum Christum sequentes. Humillimo nunc incipiunt modo, quod pedem inferre nequeunt, quos si admiserimus expellemur. Qui non credit audiat quod predictum est de huiusmodi.

(28) M. G. H. SS., t. XXIII., p. 376, Ph. Pouzet, loc. cit., p. 18, おなじく p. 22 参照。

.....Vidimus tunc temporis aliquos de numero eorum, qui dicebantur Pauperes de Luduno, apud sedem apostolicam cum magistro suo quodam, ut puto Bernhardo, et hi petehant, sectam suam a

sede apostolica confirmari et privilegiari. Sane ipsi dicentes, se gerere vitam apostolorum nichil volentes possidere aut locum certum habere, circuibant per vicos et castella. Ast domnus papa quaedam supersticiosa in conversatione ipsorum eisdem obiecit, videlicet quod calceos desuper pedem precidebant et quasi nudis pedibus ambulabant; preterea cum portarent quasdam cappas quasi religionis, capillos capitis non attondebant nisi sicut laici; hoc quoque probrosum videbatur in eis, quod viri et mulieres simul ambulabant in via et plerumque simul manebant in domo una, et de eis diceretur, quod quandoque simul in lectulis accubabant, quae tamen omnia ipsi asserebant ab apostolis descendisse.

(29) Migne, *Patrologia Latiana,* t. CLXXXII. col. 677–678.

Haec est haeresis illorum. Dicunt apud se tantum Ecclesiam esse, eo quod ipsi soli vestgiis Christi in haereant; et apostolicae vitae veri sectatores permaneant, ea quae mundi sunt non quaerentes, non domum, nec agros, nec aliquid peculium possidentes: sicut Christus non possedit, nec discipulis suis possidenda concessit. .....De se dicunt.: Nos pauperes Christi, instabiles, de civitate in civitatem fugientes, sicut oves in medio luporum cum apostolis et martyribus persecutionem patimur: cum tamen sanctam et arctissimam vitam ducamus in jejunio et abstinentiis, in orationibus et laboribus die ac nocte persistentes, et tantum necessaria ex eis vitae quaerentes. Nos hoc sustinemus, quia de mundo non sumus: .....

(30) *Gesta Pontificum Cenomannensium,* in Bouquet, *Recueil des historiens des Gaules et de la France,* t. XII., 547–548.

Per idem fere tempus, in adjacentium finibus regionum surrexit quidam hypocrita, quem propria actio, mores perversi, dogma detestabile scorpionibus et parricidalibus dignum protestantur suppliciis. Is enim ovium spoliis lupi rapacis rabiem ocultans, vultus et occulorum incitatione mari conformis naufragoso, coma succinctus, intonsus barba, corpore procerus, pernix incessu, nudis humo bruma bacchante serpens vestigiis, expeditus affatu, terribilis sono, juvenis aetate: nullus ei nitor in vestitu, victus ejus a publico in promptu dissimilis, hospitium in aedibus Burgensium, mansio in porticu, coena, cubile in coenaculo. .....

Quid multa? idem namque mirae sanctitatis et scientiae circumquaque rumore, non merito, falsitate, non vero habitu, erat cerebrior; non moribus, non religione, sed opinione. Matronae etiam atque impubes pueri (nam utriusque sexus utebatur lenocinio) pro varia vice huic accedentes, excessus suos profitentur; sed augmentant, plantas ejus, clunes, inguina, tenera manu demulcendo. Isti plene tanti viri lascivia exhilarati et adulterii enormitate, publice testabantur numquam se virum attrectasse tantae rigiditatis, tantae humanitatis et fortitudinis, cujus affatu cor etiam lapideum facile ad compunctionem posset provocari: hujus itaque religionem et coelibem vitam Monachi et viri Anachoritae et universi Regulares imitari. Asserebant quoque sibi a Domino Deo antiquam et authenticam Prophetarum collatam fuisse benedictionem et spiritum, quo mortalium excessus caeteris incognitos, visa tantum eorum facie, cognosceret et proderet.

(31) A. Dondaine, "Aux origines du valdéisme: Une profession de foi de Valdès," in *Archivum Fratrum Praedicatorum* (1946) p. 218, R. Manselli, op. cit., p. 51, pp. 120–123, M. Mollat, loc. cit., pp. 38–42, E. Delaruelle, "Le problème de la pauvreté vu par les théologiens et les canonistes dans la deuxième *moitié du XIIe siècle*", in *C. F. 2*, p. 59–62 参照。

(32) M. D. Chenu, "Moines, clercs, laïcs, au carrefour de la vie évangelique", in *La théologie au douzième siècle* (Paris, 1957), pp. 225–251, Vicaire, op. cit. 等を参照。

(33) C. W. Bynum, *Jesus as mother*, (Berkeley, 1957), pp. 31–52.

(34) C. Violanti, 'Hérésis urbaines et hérésies rurales', in *Hérésies et sociétés dans l'Europe pré-industrielle 11e-18e siècles*, (Paris, 1968), pp. 186–187.

(35) J. Leclercq, "Comment vivaient les frères convers" in *I Laici nella《SOCIETAS CHRISTIANA》dei secoli XI e XII (I Laici)*, (Milano, 1968) p. 171.

(36) L. K. Little, "*Religious Poverty*" pp. 215–216.

(37) G. Duby, *Les trois ordres ou l'imaginaire du féodalisme*, (Paris, 1978). この著作に関しては、あまりにも壮大なスケールのため、コメントを留保したい。

(38) *Super Apocalypsim*, in G. Gonnet, *E.F.V.*, p. 46.

Unde tibi illustris regio gallicana, unde tibi de novo spernere et parvipendere privilegium commendationis antiquae: Gallia monstra non habet! Galliarum sedes prima Lugdunum novos creavit

apostolos nec erubuit apostolis etiam sociare. Ad demoliendam vineam Domini vulpeculae prodierunt, personae contemptibiles et prorsus indignae, praedicationis officium usurpantes aut penitus aut pene sine litteris, sed potius sine spiritu, juxta illud: Animales, Spiritum non habentes, circuierunt urbes et viculos sub praetextu pauperitatis et praedicationis obtentu, impudenter panibus alienis sine labore manuum victitantes. Verbis compositis et exquisitis accuunt linguas suas, novos exhibent psittacos, ignorantes de quibus loquuntur, de quibus affirmant.

(39) H. Grundmann, "《Oportet et haereses esse》: Il problema dell' eresia rispecchiato nell' esegesi biblica medievale", in *Medioevo Ereticale* (Bologna, 1977), tr. from "Oportet et haereses esse" in *Archiv für kulturgeschichte* (1963), pp. 41–42.

(40) Y. Congar, "Les laïcs et l'ecclésiologie des 《ordines》 chez les théologiens des XIe et XIIe siècles", in *I Laici*, p. 99.

(41) Y. Congar, loc. cit., pp. 110–114.

(42) ibid., p. 113.

(43) E. Delaruelle, loc. cit., pp. 39–50.

(44) Y. Congar, loc. cit., p. 111.

Summary

On the Conversion of Valdes

This essay attempts to ascertain certain details about the life and thought of Valdes, a layman Christian thinker, who was condemned by the Roman Catholic Church as a heresiarch in the late 12 th century. Valdes was a wealthy merchant in Lyons when he had a sudden conversion; he abandoned his fortune and began to preach without license or the approval of Church officials. Nevertheless, he won wide support among the populace.

Valdes's main motivation centered on the appeal of the true apostolic life, to which it appears he was singlemindedly guided by his socio-religious position in contemporary society. In those days, some common people became wealthy by accumulating property and promoted themselves to a higher social status.

Religious roles assigned by the Church to laymen like Valdes, however, were still very minimal in those days. Thus, Valdes's religious zeal and the social means he utilized to express himself as a religionist were definitely out of proportion. For Valdes, the salvation of the soul was paramount; thus, given such a spiritual-social situation, his proselytizing actions assumed radical forms.

In those days, there were many other men and women of a similar spiritual nature who led lives akin to that of Valdes and who joined like-minded religious movements. Not only evangelical heretics like Valdes but also dualist heretics such as Cathari and Publicani represented comparable trends of evangelical awakening in that particular age.

Scholars have often treated Valdes's role and positionin an exaggerated manner, completely disregarding his social background. Herein, I have tried to present a more balanced position of Valdes's life and thought in the general milieu of contemporary lay piety. This approach in no way diminishes Valdes's historical importance. His radicalism surely contributed to spurring on the introduction of lay religious zeal into the spiritual and ecclesiastical life of the time.

It can be said that the conversion and proselytism of Valdes acted as a mirror reflecting 12 th century European religious activity.